

## アーサーと夢

——どうしてグロリアーナと出会えないのか——

成 富 紀 子

### Arthur and His Dream ; Why Can't He Meet Gloriana?

NARITOMI Noriko

**Abstract :** The titular knights in *The Faery Queene* are figures who continue to develop. Spenser says in *Letter to Raleigh* that Arthur is the main character symbolizing magnificence which includes the twelve Aristotelian moral virtues. He sees the image of Gloriana in his dream or vision, and falls deeply in love with her. Following his quest for Gloriana, readers expect to see a beautiful last scene in which Arthur will meet Gloriana in her palace in Fairy Land. But Arthur disappears in the middle of Book VI and his quest is never completed. Why can't he meet Gloriana?

From the psychological point of view, the vision of Gloriana can be seen as his and the reader's (courtier's) anima. Anima images are the female part in men's unconscious mind. And men have to recognize their anima images as part of themselves and inject them into themselves to start individuation. After Book III, Gloriana is mentioned as a god like the Sun. This means that she is developing into some supreme divinity by herself and she doesn't need any male partner who should be injected into herself. Thus Arthur can't meet her to become a perfect man. As for courtiers, Gloriana is also beyond their recognition because human beings can't inject the image of gods into themselves. So what they get to recognize as their anima image is not Gloriana, but Queen Elizabeth herself. I think Spenser's real intention to discipline courtiers is to have them recognize this point. Only in this way would the quest for Gloriana be completed and would England become the country of individuation.

(一)

*The Faerie Queene* (以下 *FQ* と示す。)の各巻の主題を体現する人物たちは、物語の展開と共にどんどん変化を遂げるよう設定された、成長する主人公たちである。これは *Bildungsroman* と呼ばれるもので、中世の騎士道物語 (Romance) になぞらえながら、主人公たちは、forming, fashioning, growth, generation, education されるのである<sup>1)</sup>。その中で体験する恋物語も、危険な冒険も彼らの成長の糧となり、作品構成上は必要不可欠な要素となるのである。このような観点から考えると、この作品は主人公たちの精神的発達をたど

る、人格形成の物語と言えよう。またその上、当時の歴史及び宗教に関連した詳細な隠喩もふんだんに盛り込まれるため、スペンサーが作品中に施したアレゴリーは、一筋縄ではない様相を呈してくる。我々読者はまずこの複雑な二重、三重のアレゴリーに魅了され、その謎解きに引き込まれるのだが、上に述べた人格形成の観点から考えてみれば、これら謎解きの取り組みの中で未だに解決されない最大の謎が残っている。それは作品中で、妖精の王国が舞台となったクライマックスがないことである。主人公たちがそれぞれの冒険を完遂し、精神的発達を遂げ、人格の完成した晴れの姿で祝う、至福に満ちた場面である。そしてなによりも妖精の王国の宮廷で、アーサー (Arthur) とグロリ

アーナ (Gloriana) が出会い、それぞれの騎士たちが美しい伴侶と共に勢揃した上で、二人が誓う永遠の愛の場面である。これは読者の誰もが一番目にしたいと思う場面であり、また目にするはずだと確信に近いものを持ち続けながら読み進めている場面である。ところが期待はずれなことに、アーサーは六巻の途中で姿を消したきり作品の表舞台に二度と姿を現さない。

主人公たちの成長をスペンサーが作品の一つの柱と考えていたのなら、読者が期待するこの最高の場面をどうして描かなかったのであろうか。アーサーはグロリアーナとどうして出会えないままなのであろうか。もし意図的に描がなかったとしたのなら、スペンサーの最終的な目標は、安寧のフェアリーランドで至福に満ちた結婚を挙げる、徳を体現し成長を遂げた主人公たちではないと言うことになる。彼らは三々五々姿を消し、物語の途中で消えてしまっていくのもその為であらうか。作品が未完であることを差し引いても、主人公たちの行動、あるいはアーサーの恋の成り行きは、あまりにも不確実、不安定と言わざるを得ない。主人公たちは人格の完成を目指すと言われながらも、決して全うされないのである。言い換えれば、スペンサーは読者の好奇心をうまく逸らし、我々に決して満足を与えないように作品を描いた事になる。それでは、いったい彼らの真の存在意義と、危険な冒険は、何なのであろうか。故意に幸福なシーンを描けないスペンサーの真意は何なのであろうか。

ここで、その答えを考えるにあたり、『ローリーへの手紙』(Letter to Raleigh) の中でスペンサー述べているこの作品の目的から、この作品の読者とはいったい誰なのかをまず確認しておきたい。スペンサーは誰に主人公の成長を読ませたかったのか、誰のために主人公たちは成長していくはずであったのか、と言うことである。以下がその部分である。

“The generall end therefore of all the booke is to fashion a gentleman or noble person in vertuous and gentle discipline :” (Letter to Raleigh ll. 7-8)<sup>2</sup>

“a gentleman or noble person”とはもちろんエリザベスを頂点とする貴族階級の男女である<sup>3</sup>。スペンサーはこれらの男女たちに、自分の作品が読まれることを想定して FQ を書いたわけである。さらに彼らを如何に教育 (discipline) するかをこの作品の出発点としている。FQ の支点がある社会階級層に置かれている事を再確認すると、この作品の意義にも新たな視点

が生まれてくる。貴族階級の男女たちを教育するということは、単に中世以来の理想の騎士像を描くことを超え、エリザベス女王 (ここで、男子君主ではなく女性君主であることを強調しておく) 個人に仕える、より良き、より完璧な臣下像を描くことが第一義的に含まれるわけである。つまり、妖精の女王の探求物語の体裁を取りながらも、一般的な騎士道物語の世界を離れ、イギリスエリザベス朝の特定の世界へと舞台が狭められるのである。そして、その中でも臣下の立場である男性、女性たちだけに焦点を当て、ある特殊な条件 (女性の君主に仕える) に見合った完璧な人物像に如何にしてなり得るか、そのお手本を示した物語となるわけである。主人公たちの冒険の目的もこの一点に集約され、騎士、貴婦人たちの成長は、徳の体現のみを究極の目的としたのではない事となる。

それでもなお繰返すが、スペンサーはなぜ臣下たちにとって究極のお手本ともいえる、エリザベスに見合った最上の臣下像を描かなかったのか。エリザベス朝という舞台背景からは、クライマックスを書くに至ることができない理由がスペンサーの認識の中で存在したのであろうか。本論文では、この作品の読み手であった「臣下たちの視点」という新たな観点から、物語の中心人物であるアーサーの精神的成長と人格形成を踏まえ、心理学的解釈を加えて上に述べた FQ 最大の謎に迫ってみたいと思う。

## (二)

アーサーは『ローリーへの手紙』の中で、

“So in the person of Prince Arthure I sette forth magnificence in particular, which vertue for that (according to Aristotle and the rest) it is the perfection of all the rest, and conteineth in it them all, therefore in the whole course I mention the deeds of Arthure applyable to that vertue, which I write of in that booke.” (ll. 37-40)

と、アーサーには物語の核を成す人物としての役割が説明されている。彼はアリストテレスの十二の美德を完備する人物として、全巻を通して描かれることとなっている。それぞれの守護する登場人物たちを統括する人物と言ってよい。アーサーの冒険と、登場人物たちのそれとは共に進み、アーサーの成長は、彼らの成長と共に深くなるという相互補完関係にある。このア

アーサーと徳を守護する登場人物たちとの関係に、読者としての臣下たちの視点を加えた時、臣下たちは、アーサーの旅を辿りながら、自分たち自身も登場人物たちと出会い、冒険し、心理的に彼の試練を追体験する事となる。そうなることで、それぞれの巻の登場人物たちの持つ意味は、純粋な徳の体現者というマクロコスモスの領域から、完璧な紳士たるための試練という、ミクロコスモスの領域へと転じる。

第一巻から第六巻までの徳も、臣下たちの乗り越えられるべき試練として存在していると考えられる。まず、第一巻から第六巻までの主人公たちは、神聖を体現する赤十字の騎士 (the knight of the Red Crosse), 節制を体現するサーガイアン (Sir Guyon), 貞節を体現するブリトマート (Britomart), 友情を体現するキャンベルとトリアモンド (Cambel and Telamond), 正義を体現するアーティガル (Artegall), 礼節を体現するサーキャリドア (S. Calidore) である。つまり、このそれぞれの徳 (主人公たち) が、独立して存在すると同時に、アーサーを通して臣下一人一人の中で獲得され、統合されていく徳と考えられる。第一巻を読み終えた時点で、神聖を獲得し、第二巻で節制を得、第三巻で貞節をと、第六巻を読み終えるまでに六つの徳のすべてを獲得する葛藤の旅である。アーサーが当時の実在の臣下の誰かを言及したものであるとする考えもあるが、以上のように考えるとアーサーは、読者全てに当てはまる人物と考える方がより自然であろう<sup>4)</sup>。

また物語を通して流れる時間も、物語中の文字通りの時間と、人間の心理的発達をあらわす時間の二種類が存在することになり、二重性が前提となる。さらに心理的発達の時間には、アーサーの人格形成の時間と、臣下たちの人格形成の時間が同時進行している事になる。アーサーの視点からは、グロリアーナに見合う完璧な騎士、自立した男性に成長していく時間であり、臣下たちの視点からは、エリザベス女王に仕える完璧な人格を持った人間に成長していく葛藤の時間が延々と流れているわけである。

では、アーサーの行動を辿りながら実際に葛藤の旅がどのように展開していくのか、アーサーと臣下たち両者の人格形成がどのように進められて行くのかを具体的に見てみよう。

### (三)

アーサーは、第一巻の序歌で、美女を求めて苦しい

旅路についている旨を早々に告げられている。彼はすでに葛藤の旅路に出ているのだが、どうして彼が葛藤の旅路についたか、その理由は第一巻の九篇で詳しく語られる。本人自ら旅の目的を語るシーンは、重要な意味を持つ。目的の意識化が行われるからである<sup>5)</sup>。人格形成の第一歩は意識する事から始まる。アーサーはユーナ (Una) に促される形で、重い口をようやく開くのである。

For wearied with sportes, I did alight  
From loftie steed, and downe to sleepe me layd ;  
The verdant gras my couch did goodly dight,  
And pollow was my helmett fayre displayd :  
Whiles euery sence the humour sweet embayd,  
And slombring soft my hart did steale away  
Me seemed, by my side a royall Mayd  
Her daintie limbes full softly down did lay :  
So fayre a creature yet saw neuer sunny day.  
( I. ix. 13)

Most goodly glee and louely blandishment  
She to me made, and badd me loue her deare ;  
For dearely sure her loue was to me bent,  
As when iust time expired should appeare.  
But whether dreames delude, or true it were,  
Was neuer hart so rauisht with delight,  
Ne liuing man like wordes did euer heare,  
As she to me deliuered all that night ;  
And at her parting said, She Queene of Faries hight.  
( I. ix. 14)

アーサーが自ら語っているように、彼は夢の中で出会った美女にすっかり心を奪われてしまう。これは中世ロマンスの伝統である、女性の誘惑に負ける騎士の体裁を踏襲してはいいるが、まだ精神的成長を果たしていない人間の安易さと、単純さが如実に現れている典型的な場面とも言える。彼の思考は受動的であり、批判をする能力を失った思考停止状態にある。いい意味でも悪い意味でも、彼はまだ若い、未完成の男なのである。このグロリアーナと思われる女性とアーサーとの出会いは、はたして本当に夢の世界の事なのか、それとも現実に起こったことなのか、議論の余地を残してはいる<sup>6)</sup>。またスペンサー自身も、『ローリーへの手紙』の中で、“to have seene in a dream or vision the Faery Queen” (l. 30) と、夢 (dream) なのか、それ

とも幻(vision)なのか両方の可能性のある曖昧な表現をしている。どちらの場合もグロリアーナが虚像に過ぎない事は同じであるが、夢(dream)であれば、アーサーとグロリアーナの会いは現実の出来事ではないし、幻(vision)であれば、アーサー自身は、この出会いを確かに現実に起きたこと認識していることになる。また、この夢のシーンの後に続く場面で、“When I awoke, and found her place deuozyd,/And nought but pressed gras where she had lyen,” (I. ix. 15. ll. 1-2)と、ここでも人が存在した気配を草の抑えつけられた跡で表現し、現実である含みを残している。しかしこの場面は、心理的発達の観点から考えると、現実の人物との出会いとはっきり区別されなければならないと私は考える。

人格形成の葛藤は、心理学的には、自己の無意識界に存在する異性的性質を意識する事から始まる。第一段階として反対の性、つまり男性の場合は女性に、女性の場合には男性に、自己の異性的性質が投影されることがある。これがアニマ、アニムス像と呼ばれるものである。これらの像は自己の性とは正反対のもので、異性に投影されてはいるが、決して他者ではなく、自己の無意識界にある、本人がまだ知らない、本人の一部である。またこれらの像は、単一でないこともすでに認められており、男性のアニマ像の場合は単一の二面的な像が活動するのに対して、女性のアニムス像では、多数の像が活動することも確認されている<sup>7)</sup>。これらを投影した他者から区別し、自己のものだと認識し、自分の中に取り込み、対立状態から調和の取れた共同作用の成立をみることで人間の心の発達が完成されるわけである。自己の無意識の世界と意識の世界の相反する二つの性質を融合させ、対立状態から解き放つのである<sup>8)</sup>。

以上のことを前提に考えると、彼の夢の世界は彼の無意識の世界の反映であり、その女性像は彼の「アニマ像」と考えられないだろうか。見知らぬ恋人が睡眠中に現れ、彼のものと決め付けられていて、彼も彼女なしでは生きていけない状態は、心理学的には疑いもなく彼自身の半身としてのアニマ像である<sup>9)</sup>。さらにアーサーが語るこのグロリアーナと思われる女性の描写が、無意識の世界の彼のアニマ像であることを前提に考えると、この女性の描写は、多分に彼の願望を反映した女性像となり、真実とは無関係であると言っても過言ではない。はたして本当に美女であったのか、王家の乙女であったのか、誰もそれを確認できないのである。また、妖精の女王という名も、彼は直接本人

から聞いたのではなく、そう耳にただけである。耳にした言葉をすぐ信じてしまうのは、願望的アニマ像を創り出す時の弊害があらわれている状態である<sup>10)</sup>。このことから彼のアニマ像は、特に願望的アニマ像の特徴を持っていると言えよう。アニマ像の持つ性質から、投影の対象が異性に限るためアーサーは自己愛に陥らずにいるが、これは多分に彼自身の自分に対する願望の反映であり、アーサーはかなりナルシズムの傾向にある。

しかし、彼のグロリアーナ像を自己愛の対象に過ぎない無価値なもの判断してはいけない。なぜならこの像が彼の無意識の中に存在する、彼自身のアニマ像である以上、この像こそが彼がこれから成長する上で、解決しなければならない彼自身の問題を映し出しているからである。彼の問題は、願望的心象をアニマ像として創り出したところにある。このため、彼の抱えた試練は今後の物語展開上いっそう解決困難なものとなっていく。もしアニマ像がすでに作品中に登場している人物に投影されるなら、たとえ願望型アニマの傾向がであっても、投影が投影だと認識され、いずれ自分自身の中に投影され、対象が解き放たれる過程を経て、その結果人格の成長を見るという、典型的な物語の展開が期待できたわけだが、彼の場合、まだ見知らぬ理想の女性に投影されたため、まずこれが誰の事なのかを探す旅に出なくてはならない。それから二たびこれが自身の願望である事に気が付かなくてはならないのである。この二回の意識化と言う難しさを、アーサーはこの夢を見る事によってスペンサーに背負わされたのである。先ほどの夢を見た後の描写も改めて彼が最初の意識化の過程に入ったことを表すものと解釈されよう。彼は確かに夢だと思っているが、彼の横の草が、いかにも現実の事のように、人がいた跡を残していたのは、彼の無意識の世界(夢の世界)と意識の世界(現実の世界)とが確かにつながり始めた事を意味する。アーサーは意識のない状態ではあったが、全てが夢の出来事でもないのである。それゆえスペンサーの選択した一見曖昧に見える表現も、実は意味深長で、夢か現実かという二者対立的な解釈は的を射ていない事がおのずから理解されよう。まさに夢でもあり現実でもあるわけである。

もう一度、まとめてみると、グロリアーナはアーサーの願望的アニマ像である。具体的に彼の願望は、自分の結婚相手として相応しい女性が、美女であり、王家の乙女である事になる。人格形成の観点から考えると、今まで意識下に存在していた彼の願望が、夢の世

界を通して意識の世界に初めて現れ、彼は自己満足の世界から一歩踏み出し、個性化への階段を上り始める事となる。夢を見る前のアーサーと、夢を見た後のアーサーとでは、心の発達是一段階進み、これからアーサーが人格形成のための願望と対峙する葛藤の旅に出る事が暗示されている。

次に読者である臣下たちの視点からこの夢を考えてみよう。彼らにとっても、ここが個性化の旅の出発点となる事には違いない。自分たちもこれからしっかりと成長していかなければいけないのである。彼らがこの夢の場面を読んだとき、もちろん妖精の女王として、自分たちの君主であるエリザベス女王を自然と思いつかべたであろう。アーサーの相手は間違いなくエリザベスである。エリザベスの相手が、アーサーであると言った方が、正確かもしれない。ところがグロリアーナはアーサーのアニマ像である。臣下たちがエリザベスを心の中に登場させることは、グロリアーナはアーサーのアニマ像であり、そしてエリザベス女王であると言う新たな構図が付け加えられるわけである。アーサーの夢に共振して臣下たちのアニマ像が構築されながらも、アーサーのそれとは臣下たちのそれとは微妙なずれが生じたわけである。つまり妖精の女王と言う名の無意識下に存在していた願望的な女性を、臣下たちもアーサーと共に意識に上らせてしまった結果、完璧な理想（グロリアーナ）と、理想的な現実（エリザベス）と言う二つのアニマ像を生み出したわけである。その上、エリザベス女王が自分たちの君主であることで、臣下一人一人のアニマ像でありながらも、個人の域を超越したアニマ像でなければならないと言う、矛盾した条件も付くことになる。個人の域でのアニマ像であれば、自由に投影されるはずのものが、ここでのアニマ像は、普遍的でかつ超一級でなければならない。これから自分たちが受け入れ、投影を試みなければならないアニマ像は、肉体を持った一人の女性でありながら、いまだ意識に上った事のない夢のような女性、女神と言ってもよい女性像なのである。臣下たちにとっては、人格の領域でのアニマと自我の結合であるべきものに、アーサーの夢は、神の領域を持ち込ってしまったと言えよう。自分たちははいったい何ものであるのか、どうあるべきなのか、どちらが本当の君主であるのか、この答えを求め、アーサーと共に個性化の旅に出るのである。

#### (四)

こう考えると、アーサーにとっても、臣下たちにとってもこの作品は過酷な経験を求めるものとなる。高次な神の領域にあるべきものを、自分自身の中に取り込まなければならない運命を出発点としているからである。アーサーとグロリアーナが会う可能性がこの夢をきっかけに逆に低いものになったと言っては言い過ぎであろうか。それでもなおアーサーは、この試練の中、徐々に知識を獲得していくところから、個性化の旅をスタートさせる。夢を見る前の彼は、自分自身の出生を知らず、思考停止状態であった事は既に述べた通りである。第一巻で彼は自分の氏、素性を尋ねられた時、“A thing without the compas of my witt :” (I. ix. 3. 1. 2) と答え、その質問は自分の能力 (wit) を超えたものとしている。この答え方からしても、彼はまた口に出して説明するだけの知識を持ち合わせていないのである。ただ、魔術師マーリン (Merlin) に何度も自分の生い立ちを尋ねてはいる。マーリンの答えは、“whose aunswere bad me still assured bee,/That I was sonne and heire vnto a king,/As time in her iust term the truth to light should bring.” (I. ix. 5. 11. 7-9) と、「時」(iust term) がくれば王家の血筋でいずれ王になる者である事を約束している。この「時」とは、アーサーがまさにグロリアーナと出会うときと考えられよう。魔術師マーリンの存在は、アーサーの個性化において大きな役割を果たしている事を確認しておく必要がある。彼は、スペンサーが『ローリーへの手紙』でアーサーの養育者として説明されているが、マーリンは魔法を施す不思議な力を持った人間である事に特徴があるのではなく、彼はアーサーの精神的な成長に必要な不可欠な知識を与える人物である所が注目になる。未熟なアーサーにとっては、父性的な立場からアーサーの男性的な領域を強化する役割を果たしているのである。アーサーがまだ持ち合わせていない知識を与える立場の人間として。第三巻において、ブリトマートがまだ見ぬ恋人ガイアンのことを尋ねに行くのもまた彼のところである<sup>11)</sup>。

結局アーサーは第三巻で、『ブリトン年代記』(Briton moniments) を読み、自らの氏素性及び王家の歴史を知る事となる。これで彼は今まで持ち合わせていなかった知識を得、意識レベルは一段と向上したことを意味し、一回目のクライマックスを迎えるに至る。また彼は夢を見てから第三巻に至るまでに、赤十字の騎士

との出会いで神聖を得、ガイアンと出会って節制を獲得している。その証拠に巻を守護する二人は、自分の名を冠する巻を終えると、自然に消滅するがごとく姿を消している。第一巻の赤十字の騎士の場合は、第三巻でブリトマートと分かれて以来、誰にも言及されることもなく消えてしまい、第二巻のガイアンの場合も、第五巻で突然表れて消える。役割を終えたアーサーの中に統合されると彼らは消えるのである。

それぞれの徳を守護する人物たちとの邂逅で、彼の意識レベルは着実に上がっていくのだが、しかし彼はまだグロリアーナとの距離を埋める事が出来ないでいる。それどころか、彼女との距離はますます広がったようである。第三巻以後は、第六巻でアーサー以外の人物によって二度、グロリアーナは言及されるのみであるが、その描写は第一巻でアーサーの夢に出てきた人間味あふれる誘惑するような性的魅力を備えた人物像から、少なからず変化を遂げている。まず10篇の4連で、“(Saue onely *Glorianaes* heauenly hew/To which what can compare?) (VI. x. 4. ll. 7-8) と美しさが称えられ、28連で“*Sunne of the world, great glory of the sky,/That all the earth doest lighten with thy rayes,/Great Gloiriana, greatest Maiesty,*” (VI. x. 28. ll. 1-3) と偉大さが賛美される。ここで用いられている“*heauenly hew*”(天の彩り)、“*Sunne of the world*”(世界の太陽)、といった言葉は、エリザベス女王を形容する最高の表現であると同時に、神の領域へと彼女を高めるものである。グロリアーナがアーサーの願望的アニメ像である事に戻ってみると、彼のアニメ像は、第三巻から第六巻の間で独りで進歩を遂げ人間の域を完全に越えてしまったことが読み取れる。これでは人間の領域に存在しているアーサーと結合する事は出来ない。神は神とだけ結合し、新たな神の姿をとることはあっても、人間と交わって成長を遂げる事は決してないからである<sup>12)</sup>。アーサーはこれ以上個性化の旅を続けても、もうグロリアーナとは出会う事は期待できない。特に、“*Sunne*”(太陽)と言う表現を彼女に与えたと言う事で、グロリアーナは自己完結しており、誰との結合も必要としないのである。男と女が相互に補足し合う事のないウロボロスの女性元型にグロリアーナが変容を遂げた結果である<sup>13)</sup>。これでは男性が何の役割も演じる余地はない。

それでは、アーサーの個性化の旅はいったいどうなるのであろうか。彼はグロリアーナを求めて、人間の領域での成長を続けるべく第六巻まで旅を続けるのであるが、彼の人間としての個性化が進めば進むほど、

グロリアーナとの距離は広がっていくと言う皮肉な結果となっている。彼はマーリンや、他の人物との出会いで一回目の意識化には徐々に成功していくが、二回目の意識化は不可能であるよう設定されていたわけである。アーサーが神の領域へ昇華すれば、二人の統合の可能性がないとはいえないが、現実的とはいえず、彼は途中で姿を消さざるを得なくなる。他の登場人物たちが姿を消していくのと、彼が姿を消したのとではこの点において意味が違っている。

次に臣下たちの個性化はどうであろうか。彼らもまたグロリアーナを自分たちのアニメ像とする限りにおいて、個性化を全うする事はできない。彼らも神と統合する事は出来ないからである。人間が神との統合を試みた場合、いかに悲惨な結果になるかを、スペンサーは、アーサーの従者、ティミアス(Timias)がベルフィービ(Belphebe)に恋する場面で暗示している<sup>14)</sup>。この場面を読んだ時、臣下たちは、強い共感を覚えた事であろう。神を愛する事は身の破滅を意味するのだと。そして彼らは次第にグロリアーナとエリザベスを切り離し、等身大のエリザベスこそが、彼らのアニメ像であると認める事になる。人間領域での自分たちのありのままの君主を受け、しっかりと自分たち自身の中に投入すること、それこそが、彼らが理想の臣下として生きる事のできる唯一の道なのである。アーサーは消えてしまい完全な個性化を見ずして物語は幕を閉じるのだが、臣下たちの視点はしっかりとこの一点に残っているのではないだろうか。言い換えれば、この時点で初めてイギリスの個性化が成立し、エリザベス朝イングランドの繁栄が始まるのである。スペンサーが真の教育の目的もこの点であろう。

最後に、第三巻でのアーサーの言葉に注目したい。

Oft did he wish, that Lady faire mote bee  
His faery Queene, for whom he did complaine :  
Or that his Faery Queene were such, as shee :  
And euer hasty Night he blamed bitterlie.  
(III. iv. 54. ll. 6-9)

フロリメル(Florimell)を追っているとき、思わずアーサーが漏らした言葉であるが、彼女が妖精の女王であってくれたらと言う思いは、読み手すべてに共通する思いであろう。もしそうなら、アーサーは確実に彼女と出会い、幸せが約束されているものをと。

アーサーはグロリアーナとは出会えない。が、臣下たちは、二つのアニメ像の呪縛から開放され、エリザ

バスと出会うことを、スペンサーは願っていたのである。

## 注

- 1) A. C. Hamilton ed., *The Spenser Encyclopedia* (Toronto and Buffalo: University Of Toronto Press, 1990), p. 114.
- 2) A. C. Hamilton ed., *The Faerie Queene: Edmund Spenser second edition* (London, New York: Longman, 2001), p. 714. スペンサーの作品は全てこの版による。以下、作品からの引用は、その直後に巻、篇、連、行の順番に括弧に入れて示す。
- 3) Hamilton ed., *Spenser The Faerie Queene second edition*, pp. 714-15. “a gentleman or noble person”の注において、スペンサーは Dedicatory Sonnets に女性も含めている事から、この言葉には女性を含む意味があることを示唆している。
- 4) Hamilton ed., *Encyclopedia*, p. 71.
- 5) E・ノイマン, 林 道義訳『意識の起源史』上 (紀伊国屋書店, 1984), pp. 283-87.
- 6) Hamilton ed., *Spenser The Faerie Queene second edition*, p. 115.
- 7) 安部一智, 長野 潤訳『中世知識人の肖像』(新評社, 1944), p. 248.
- 8) E・ユング著, 笠原 嘉訳『内なる異性—アニムスと

アニマー』(海鳴社, 1978), p. 74.

- 9) 同書, p. 74.
- 10) 同書, p. 30.
- 11) 同書, p. 16.
- 12) E・ノイマン, 林 道義訳『意識の起源史』(紀伊国屋書店, 1984), p. 322.
- 13) ウロボロスについては、以下に詳しく記述している。  
A・グッゲンビュール-クレイグ著, 樋口和彦・武田憲道訳『結婚の深層』(創元社, 1983), pp. 74-89.
- 14) この場面は、第4巻, 7篇, 42連から47連にみられる。

## 参考文献

- Gross, Kenneth. *Spenserian Poetics*: Ithaca and London: Cornell University Press, 1985.
- Lockerd, Jr. Benjamin G. *The Sacred Marriage: Psychic Integration in The Faerie Queene*: Lewisburg: Bucknell University Press, 1987.
- Miller, David Lee. *The Poem's Tow Bodies: The poetics of the 1590 Faerie Queene*: Princeton: Princeton University Press, 1988.
- Silberman, Lauren. *Transforming Desire: Erotic knowledge in Book III and IV of the Faerie Queene*: Berkely, Los Angeles, London: University of California Press, 1995.